静岡大学教育学部附属養護学校小学部の生活単元学習「水遊び」についての研究

A study of the Unit, "play with water" in one of the school subjects "life" at the Elementary School for handicapped children a ffiliated to the Faculty of Education, Shizuoka University

伊藤　宏・松本知栄子・望月信子・山内英次・岩田淑子
櫻井　隆・香野　毅
Hiroshi ITO, Chieko MATSUMOTO, Nobuko MOCHIZUKI,
Eiji YAMAUCHI, Toshiko IWATA, Takashi SAKURAI, Tsuyoshi KONO

（平成17年9月30日受理）

Abstract

The purpose of this study was to investigate the behavior modification of the first and the second grade at the local elementary schools for the disabled through the water play on the slide. They were 5 boys and 1 girl who were Down syndrome and infantile autism and etc. The teaching plan of the water play on the slide was to slide with their teacher, to hand with their friends, to mimic friend's sliding.

After 7 lessons they showed the very positive attitude towards the water play on the slide. Some B girl who couldn't slide cloud walk and slide by herself. Some C boy usually build a wall around oneself but finally could wait under the slide with smiling for some friend's sliding and could get on the boat with friends.

1. 研究目的

遊びの素材としての「水」は大変魅力的な素材である。水は、入れる物によって様々な形に変形し、光りを反射して輝き、気温によって冷たく、そして暖かくも感じることができる変幻自在な素材である、また、その感触は時に優しく身体を包み込み、時には勢いよく飛び出して少し痛く感じることもある。力の加え方によって、様々な表情を見せる水は、子供たちの想像力をふくらめ、次はこうしてみよう、もっとやってみようという意欲を引き出す素材であると考えた。

本学級の児童の中には、就学前にスイミングスクールや障害児の水泳教室などで「水遊び」に親しんできた児童が3名おり、授業での「水遊び」への興味は高いと思われる。初めて経験する活動や場所に対し不安を感じる児童にとっても「水遊び」は抵抗なく入りやすい遊びであり、友達を見て自然と遊びの輪に入ったり、教師と一緒に「水遊び」をすることで、友達や教師と遊びの共有化を可能になると考えた。

盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説（文部省、2000）では、小学部の内容の1段階（1)、教師と一緒に、歩く、走るなどの基本的な運動をするとあり、さらに1段階（2）ではいろいろな器械・器具を使った遊び、表現遊び、水遊びなどをするとあり、「水遊び」では、プールの周りでじょうろを使って遊んだり、膝よりも浅い深さのプールの中で教師と一緒にいろいろな遊具を浮かべたり沈めた

り、水をすくったりするなどして遊んだりすることであると示されている。

そこで本校の「水遊び」では築山にビニールシートを敷き、ホースで水を流すことでウォータースライダーを設置した。普段の遊びの中でもすべり台で遊ぶことが大好きな児童にとって、ウォータースライダーを設置すると「やってみたい」「滑ってみたい」という気持ちを引き出すこと(外発的な動機づけ)が容易にできると思われ、また、ウォータースライダーは、滑るという特有な動きの中で、ゆっくり滑ったり、早く滑ったりと強弱をつけたり、また、頭から滑る、横向きに滑るなど滑り方を工夫することで体の動かし方(動き)の多様化が比較的簡単に計れる教材になると考えた。さらに、友達の様子を見て滑る、友達と隣で滑るなどの関わりの場面や教師や友達の様子を見て「ぼくも(わたしも)やってみよう」と挑戦する姿も期待される。さらに、二人乗りのボートで滑ることで、友達と一緒に滑るという自然な関わりの場面も可能になる。滑る→坂を上る→また滑るというシンプルな遊びは児童たちにわかりやすく、ウォータースライダーを使っていっぱい遊んだという満足感・充足感も十分に得られると考えた。また、ウォータースライダーという一つの遊び場を共有することで、順番を待つという他者とのかかわり場面も生まれる。佐々木(2003, 2004)は、知的障害や精神的遅滞の子供たちへの柔道の指導で、柔道の原理をさらに修正しその子どもに適した指導内容を準備し実施したところ、子どもの力量感覚、心理感覚が喚起され、姿勢の調整、社会的態度形成、運動能力の開発に効果が認められたと報告していた。北条博厚(1996)は、障害児(てんかん)の運動療法の意義について、1. 基礎体力の増進により、誘因となる心身のストレスに対する抵抗力を高めること、2. 機能訓練、職能訓練を通じて日常生活での意欲を高めることにあると述べ、運動実施に際しては、1. 事故の発生 2. 感覚刺激やそのほかが誘因になって発作を起こすてんかん児に対する注意を挙げている。実際には、徐々に慣らしていくこと、短期的に急激な負荷を加えないことを挙げていた。

そこで、本授業ではウォータースライダーを設置し、いっぱい遊んだ、楽しかったと体験させながら、友達や教師との関わりの中で社会的な態度(友達と一緒に仲良く、順番を守りなど)を育成するのに、『水遊び』を授業としてどのように組み立てていったら良いのか、実際の授業を通して個々の児童の授業に対する取り組み方の変容を観察し、いくつかの知見を得たので報告する。

2. 研究方法

1)日時　平成17年7月8日(金)第3, 4校時(10：50～11：30)

2)場所　プレイヤード　特設水遊び場(小学部校庭の築山にビニールシートを引き、近くの水道蛇口からホースで水を引き、築山の上から水を流し、下方では水深5cmから7cmくらいの水がたまるようにシートを工夫した。

3)単元名　キラキラランドで遊ぼう

4)単元の目標

a. キラキラランドでの遊びを通して水に親しみ、身体を使って思い切り遊ぶことができる。

b. 場や遊びや気持ちを教師や友達と共有して遊ぶことができる。

3. 児童の実態

本学級は1年生男子2名、女子1名、2年生男子3名、計6名で構成されており、ダウン症、自閉症、ソトス症候群、結節硬化症、発達遅滞と様々な障害を持った児童が在籍している。

意思伝達の手段においては、発音は不明瞭ではあるが、音声言語を用いて自分の要求を伝えること

ができる児童や、簡単なサインを用いて自分の要求を伝えることができる児童がいる。しかし、語彙の少なさや表現方法の未熟さ、また、発音の不明瞭さなどから、自分が伝えたいと思うことをどう表現していいのかわからず、黙ってしまったり、大きな声を出して要求を伝えようとしたり、また、うまく伝えられずに物を投げたり、座り込んでしまったりする場面も少なくない。

学習場面での友達との関わりについては、1年生については、教師との1対1の関わりが主である。2年生の児童は、友達のやっていることを真似したり、うまくできない友達を励ましたり、集団行動に遅れている友達を呼びにいったりする様子が見られた。自由遊びの場面では、1年生は、教師に対しては、くすぐりっこをしたり呼びかけたりして積極的に関わろうとする姿が見られる児童もいるが、子ども同士の関わりはほとんど見られなかった。2年生では、教師や友達と一緒にボール遊びや相撲などダイナミックに身体を動かす遊びを楽しむ姿が見られた。自分の好きな遊びに没頭する子、他の友達の遊びを気にしつつ、自分のペースで遊ぶ子など、場所は共有していても遊びの内容はそれぞれ違っていた。

	かかわりに関する実態	かかわりにおける教育的ニーズ	本題材の目標
A 男	・自分の好きな遊びで繰り返し遊ぶ。 ・教師に対し、場所や物の名前を言って自分の要求を伝える。 ・自分の思い通りにできない時や見通しが持てない時に大きな声を出す。 ・友達に対し、自分の思いを伝えられず、つねったりたたいたりしてしまう。(自分の座りたい席に友達が座っている時など) ・友達が遊んでいるおもちゃを見た後で、同じおもちゃで遊ぼうとする。	・友達や教師と同じ遊び場を共有して遊ぶ。 ・友達の存在を意識したり、真似をしたりしながら遊ぶ。 ・自分の思いを言葉や視覚的な物を指さして伝える。	・遊ぶ場所がわかり、順番を守って滑る。 ・二人乗りシートで友達や教師といっしょに滑ることができる。いっしょに滑った教師と万歳をする。 ・滑るときに「用意ドン」と言ってスタート係の教師に伝える。
B 女	・教師に対し、歌の題名を言って歌を歌ってほしいということを要求したり、遊びのキーワード(こちょこちょ、どんどんどんなど)を言って遊びを要求したりする。 ・経験不足のため、初めての活動に対し不安が大きい。うまくできない時には「あーっ」と声を出したり「いや」といったりする。	・いろいろな状況や場面に慣れ、遊びの幅を広げる。 ・教師や友達と一緒に遊び、楽しさを共有する。 ・自分の思いを言葉や視覚的なものを指さして伝えることができる。	・教師といっしょに滑り台に挑戦する。 ・キラキラランドに慣れ、教師や友達と同じ場で遊ぶ。 ・滑るときには「用意ドン」と言ってスタート係の教師に伝える。

	かかわりに関する実態	かかわりにおける教育的ニーズ	本題材の目標
	・一方的なかかわりで、相手の反応が期待通りでないと続かないことが多い。		
C 男	・音の出るおもちゃや鏡が好きで一人で遊ぶことが多い。ブランコで遊んでいる時には、そばにいる教師に向かって声を出し、「押してほしい」と意思表示をする。 ・教師に向かい、自分の手をたたいてうまくできたことに対しての賞賛を求めることがある。 ・自分の行きたい方向や物を指さしたり、声を出したりして要求する。手をあわせたり、右手で肩をたたいて「お願い」することもある。 ・自分の思ったようにできないときには大きな声を出したり、自分の顔をたたいたりして訴える。	・教師や友達のやっていることに興味を持ち、自ら活動できることや、やりたいと意思表示できる活動を増やす。 ・教師との1対1のかかわりの中で、自分から働きかけられる場面や内容を増やす。 ・思いをサインや指さし、発声で伝える。	・斜面を自分から登って滑り台を繰り返し楽しむ。 ・二人乗りシートで教師といっしょに滑り、滑り終わったときに拍手をして楽しさや達成感を共感する。 ・滑るとき、スタート係の教師の「用意」の合図に応じて「あー(ドン)」と声を出す。
D 男	・友達の名前を呼んだり、手を引いたりして関わろうとすることがある。 ・自分のやりたい遊びに、教師や友達を呼んで一緒に遊ぼうとする。 ・わざとふざけるなど場に合わないことをして注目を得ようとすることがある。 ・自分の行ったおみせの名前やいっしょに行った人など、経験したことを単語で伝えることができる。 ・恥ずかしそうに下を向いて要求を伝えられないことがある。	・ルール（順番や安全上の約束）を守って遊ぶ。 ・教師や友達と楽しさを共有して遊ぶ。 ・思いを言葉や視覚的な物を指さして伝える。	・滑り台の順番や遊ぶ場所（入ってはいけない場所）を守って遊ぶ。 ・教師や友達を誘って二人乗りシートで滑る。また、いっしょに滑った教師や友達と万歳をして楽しさを共有する。 ・キラキラランドに行く前に、挑戦したい滑り方を言葉や指さしで伝えたり、終わった後に楽しかった遊びを言葉で伝えたりする。

	かかわりに関する実態	かかわりにおける教育的ニーズ	本題材の目標
E 男	・自分の見つけたことや気がついたことを「あーっ」と声を上げて指さししたり、肩をたたいたりして伝える。 ・教師や特定の友達に自分から働きかけ、遊びのきっかけを作ったり、友達の真似をしたりして遊ぶ。 ・自分の思いと違うことに対しては、座り込んだり顔をしかめたりして気持ちを表す。 ・教師に対して、「やって」とサインで伝える。	・自分からきっかけを作って遊びを始めたり、友達の誘いで遊んだりする。 ・教師や友達と楽しさを共有して遊ぶ。 ・思いをサインや発声、視覚的な物の指さしで伝える。	・教師や友達の真似をしていろいろな滑り方に挑戦する。 ・教師や友達に誘われていっしょに滑ったり、自分から働きかけて教師や友達を誘ったりする。また、いっしょに滑った教師や友達と万歳をして楽しさを共有する。 ・滑るときに「(よーい)ドン」と声を出してスタート係の教師に伝える。
F 男	・活動に遅れている友達を心配して呼びにいくなど、友達への意識が多く見られる。 ・人への興味があり、来客に声を掛けるのがすきである。 ・友達や教師と一緒に遊びたいという気持ちを持っているが、興味が他のものに移りやすく、遊びを持続することが難しい。 ・場所を一人で離れてしまうことが多い。 ・自分の思いがうまく伝わらないときには物を投げたりたたいたりしてしまうことがある。教師が気持ちを代弁することで納得し、落ち着ける。	・ルールを守って遊ぶ。 ・教師や友達と場所や遊びを共有して繰り返し遊ぶ。 ・思いを言葉や視覚的な物を指さしして伝える。	・場所や順番を守って遊ぶ。 ・決めた回数は繰り返し滑り台で遊ぶ。 ・教師と相談してその日に滑る回数や滑り方を選ぶ。

4. 単元構想

かかわりについての児童のあらわれ
・友達のすることを見ていたり真似したりすることができる。
・かかわりたい気持ちをもっているが、興味が移りやすく長続きしない。また、うまく伝えられず物に当たってしまうこともある。
・好きな遊びが決まっていてなかなか広がらない。
・好きなおもちゃで一人で遊ぶことが多い。
・自分の好きな遊びで繰り返し遊ぶ。

保護者の願い
・自分のやりたいことをつたえられるといい。
・友達と一緒に遊んでほしい。

家庭で困っていること
・一方的。
・聞き入れられない。
・気持ちをうまく伝えられないでいらだつ。

教師の願い
・自分の思いを伝えられるようになるといいな。
・友達や教師と一緒に楽しさを共感できるといいな。
・人と関わりを楽しむことで遊びの幅が広がるといいな。
・ルールを守って仲良く遊べるといいな。

キラキララランドで遊ぼう

キラキララランド



5. 個の教育的ニーズと本授業の目標について

前ページの単元構想に続いて、以下の展開になる。

展開	児童の思いと予想されるかかわり【かかわりの構造】 ・教師の支援
すべってみよう （1時間）	やりたいな 滑る。（友達の隣で滑る）【ひとり（場の共有）】 「やりたい」と教師に意思表示する。【向き合い】 ・遊びの紹介、補助
いろいろなすべりかたに挑戦 （3時間）	○○くんがやっている。ぼくもやってみよう 友達が滑っているのを見る。→自分も滑ってみる。【ひとり（他者への意識）】 ・遊びの紹介、評価 ○○くんのつぎにやるぞ 順番に滑る。【向き合い】 ・ルールの説明 見てみてぼくがすべるよ 自分が滑っているのを友達や先生に見せる。【横並び】 ・遊びの共感、紹介、評価
友達やおうちの人とすべろう （3時間）	○○くんといっしょにすべりたい 友達を誘って滑る。【横並び】【向き合い】 ・友達とのかかわりの援助、意思伝達手段を伝える、意思伝達の補助 ぼくもやってみようかな 友達や教師に誘われて滑る。【向き合い】 ・遊びの広がりを促す。 楽しかったね 上手に滑ることができたことや楽しかった気持ちを伝える。【横並び】 ・共感する。気持ちを言語化する。

期待される生活の変容
- 順番を守って遊ぶことができる。
- 友達や教師を誘って遊ぶことができる。
- 友達や教師に誘われて新しい活動に挑戦することができる。

6. 本時について （本時５／７時間）

（１） 本時の目標

・ キラキラランドの中で自分の遊びたいことを選び、繰り返し遊ぶことができる。

・ 遊び場を共有し、友達の遊びを真似したり、友達を誘っていっしょに遊んだりすることができる。

（２） 展開

時間	展開　学習内容　児童の思い・あらわれ　個別の願う姿	教師の支援
10：50	遊ぶことを発表しよう きょうはアンパンマン滑りに挑戦するぞ。 ～くんといっしょにすべりたいよ。 ～先生といっしょにすべりたいよ。 A男・B女・C男 ・すべり方を指さしや言葉で伝える。 E男・F男 ・挑戦したいすべり方やいっしょに滑りたい人を指さしや言葉で伝える。 F男 ・すべる回数やすべり方、すべる友達を相談して決める。 キラキラランドへ移動。	○ すべり方の絵を提示し、いろいろなすべり方を紹介する。 アンパンマンすべり （あたまから） ゾロリすべり （あしから） イシシノシシ滑り （ふたりで） ○ 発表したすべり方や回数を遊びボードで示す。 ○ ペープサートを使い、遊び場所と約束を確認する。 ① 並ぶ。 すべるときには「用意ドン」で合図をする。

11：00

いろいろな滑り方で滑ってみよう！

○新しい滑り方を提案する。(T 3)

よーしすべろう。

○登る場所を示す。(T 1)
○遊びの中に入り、一緒に登る。(T 3)
○遊びに入れない児童を誘う。(T 4)
○並ぶ場所を示す。(T 1)
○安全を確認し、次に滑る人を呼ぶ。(T 1)

B女
教師T 2と一緒に挑戦する。

○表情を見て、負荷がかかりすぎないよう配慮しながら誘う。怖がるようなら途中から滑るようにする。(T 2)

D男・A男・F男
順番を守る。

○並ぶ際の視覚的補助として、並ぶ位置に順番をつけたマットを置く。
○一緒に並んで順番に滑ることを伝える。(T 3)

「用意ドン」すべるよ・準備できたよと伝える。

○安全確認をして「用意ドン」の言葉を待つ。ドンで笛を吹く。(T 1)
○言葉がないときには促す。

○一緒に言って言葉や発声を促す。
○言葉を待つ。(T 1)

A男・B女・C男・E男
「用意ドン」と言葉や声でスタート係の教師（T 1）に伝える。

E男
教師や友達の真似をしていろいろな滑り方に挑戦する。

すべる。

○一緒に滑り、安心してすべることができるようにする。(T 2)
○友達の滑り方を他の児童に紹介する。(T 1)
○滑り終わった後危険がないよう配慮する。(T 4)

○滑り方を見せる。(T 3)
○友達の滑り方に注意を促す。

やった！すべった！たのしかった！・ばんざいや拍手で喜びを伝え合う。

○うまくできたことを思い切り賞賛する(T 4)
○一緒に拍手をしたりハイタッチをしたりして喜びを分かち合う。
○喜びの表現方法（拍手、ハイタッチ）を示す。
○気持ちや行動を言語化し賞賛する。

C男
教師と拍手をして楽しさや達成感を共有する。

○顔を合わせて拍手をし、思い切り賞賛する。
○「楽しかったね」「すべったね」と気持ちを言語化して返す。

もう一回やろう・繰り返し遊ぶ

F男
決めた回数滑る。

○登り口への移動を促し遊びの流れを作る。(T 4)
○次への期待を持つような言葉かけをして誘う。

C男
坂を登って繰り返し遊ぶ。

○回数を示し、励ます。
○流れの中で繰り返し遊ぶことができるよう促す。

11：15

今度はボートに乗って友達や先生と滑ろう。

○新しい滑り方を提案する。(T 3)

～と一緒にすべりたいな。
・友達や教師を誘ったり、誘われたりして滑る。

○二人座ってから滑ることを告げる。

D男・F男	E男	A男・B女・C男
教師や友達を誘って滑ることができる。	教師や友達を誘ったり、誘いに応じて一緒に滑ることができる。	教師に誘われて一緒に滑ることができる。
○誰と一緒に滑りたいのか聞き、誘い方のモデルを示す。 ○相手に伝える補助をする。	○友達の誘いをサインで伝える。 ○本人の発する遊びのきっかけを拾う。 ○写真カードから一緒に滑る人を選べるようにする。	○二人座ると用意ドンをすることを告げる。 ○友達から誘われた時には表情を見て無理のない範囲で促す。

「用意ドン」すべるよ・準備できたよと伝える。

○二人そろったことを確認する。(T 1)
○安全を確認し「用意ドン」の合図とともに笛を吹く（T 1）

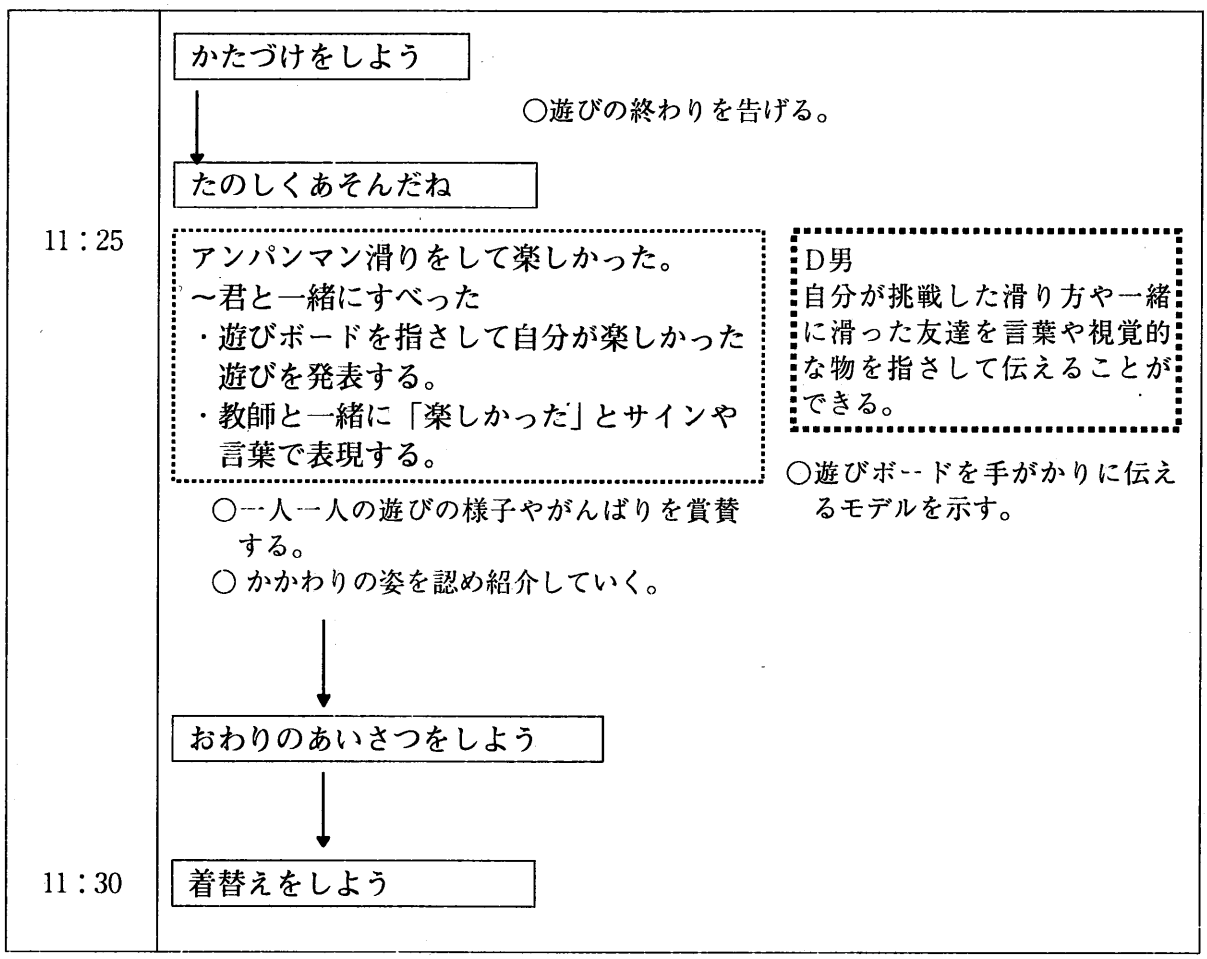
友達や先生と一緒にすべる。

○友達の滑り方を他の児童に紹介する。

やった！すべった！たのしかった！
・一緒にすべった友達や先生と万歳や拍手で喜びを伝え合う。

○うまくできたことを思い切り賞賛する（T 4）

D男・E男・F男	B女	C男	A男
教師に抱きついたり、教師や友達とハイタッチをしたり、笑顔を見せたりして自分から喜びを表現することができる。	自分から、教師に喜びを表現する。	自分から拍手をして教師の拍手を求めたり笑顔を見せたりする。	教師の言葉掛けや拍手に応じて拍手を返したりハイタッチをしたりする。
○児童からの表現を待つ。 ○喜びを身体全体で受け止める。 ○ハイタッチをしあい、友達ともできるように促す。 ○「楽しい」気持ちをサインや言葉で示す。	○喜びを受け止める。 ○がんばりを賞賛する。 ○「楽しい」気持ちを言葉で示す。	○顔を合わせて拍手をし、思い切り賞賛する。 ○「楽しい」気持ちをサインや言葉で示す。	○身体全体で楽しさを表現し伝える。 ○「楽しい」気持ちを言葉で示す。



（3）視点

キラキラランドの中で、子どもが楽しんで遊んでいる姿や教師や友達と関わっている姿が見られたか。

準備物

遊びボード、すべり方カード、お約束ペープサート、児童顔写真
順番マット、ビニールボート、笛、テーマソング

7. まとめ

本研究ではウォータースライダーを設置し、いっぱい遊んだ、楽しかったと体験させながら、友達や教師との関わりの中で社会的な態度（友達と一緒に仲良く、順番を守りなど）を育成するのに、『水遊び』を授業としてどのように組み立て、実際の授業を通して個々の児童の授業に対する取り組み方の変容を観察・分析した。

キラキラランドでの水遊びで身体をいっぱい使って楽しむ授業を通して、友達の様子を見て真似をしたり、一緒にやろうと手をつないで誘ったりする関わりの場面が多く見られた。始めはキラキラランドの中に入ることさえできなかったB子は、他の子どもが遊ぶのを見て、徐々にウォータースライダーに近づき、滑ることができた。また、普段自分一人の遊びの世界に入ってしまいがちなC男は、自分が滑った後に友達が滑ってくるのを楽しみにし、後ろを振り返って待っている様子が見られた。また、友達に誘われて笑顔を見せて一緒にボートに乗る場面も見られた。

各児童の変容を下表のようにまとめた.

	7月5日	7月7日	7月8日
A男	欠席	「もう一回いこうか」の声かけで「うん」と返事をし、登り始める。スピードが出るとうれしくて自分から坂を上がり繰り返し滑る。	自分で坂を登り繰り返し滑る事ができた。「ゾロリ行きます」「アンパンマン行きます」と滑り方を言って滑る。
B女	前半入るのを嫌がったが、教師や友達が滑るのを見て「用意ドン」「○○くんすごいね」と言う。自分から水が溜っている所に来た。授業の最後に教師と一緒に坂の途中から滑る。「もう一回やる」といって3回滑る。	スムーズに参加。教師と手をつないで坂を登り、一番上から滑る。終わった後「滑り台たくさんやったね」と教師に言う。ボートは最初抵抗するが、教師と一緒に滑ると次は友達と一緒に乗る事ができた。	慣れない人がたくさんいて、不安な様子。滑る時には怖がっていたが、下につくと笑顔が見られた。教師と一緒に滑ることから始め、徐々に一人で滑ることができた。
C男	見学	1回滑った後、水溜りで遊んでいたが、友達が滑っているのを見て、表情が変わり、自分から坂を登り始め、繰り返し遊ぶ。教師と一緒に「キラキラ」を手振りで示し滑る。拍手をして「やったよ」とアピール。	滑り終わると、自分で立ち上がり繰り返し滑る。滑り終わった後、振り返り、次に滑ってくる友達を見ている。「おーい」って言う。教師が言うと「あー」と声を出すことができた。
D男	「用意・ドン」といって繰り返し滑る。もっと速く滑りたいと色々滑り方を工夫する。(背中をつけて滑る。足を浮かせて滑るなど) 繰り返し滑る。	滑った後、ハイタッチをして教師と楽しかった気持ちを共有できた。「やったよ」と笑顔。滑る前に滑り方をサインで伝える。ボートは初め怖がったが、B女が誘うと、勇気を出して滑った。	サインや言葉で○○滑りを表現して滑る事ができた。「C男行くぞ」と友達に声をかけてボートに乗る事ができた。
E男	D男がいろいろな滑り方をしているのを見て、真似をしておなかで滑る。繰り返し滑る。	欠席	欠席
F男	見学　友達が滑っているのを見て、やりたいと意思表示した。	欠席	欠席

引用文献

文部省　2000　盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説　pp438-444

北条博厚　1996　神経疾患－てんかん－の運動指導　学校におけるスポーツ医学　pp113-115　文光堂

佐々木武人　2003　受動指導による障害者への運動療法について　福島大学教育学部論集　第75号）（教育・心理部門）　pp1-8

佐々木武人　2004　障害者の柔道指導に関する研究動向と課題　福島大学教育学部論集　第76号）（教育・心理部門）　pp11-18